

論文

被虐待相当行為経験が親準備性傾向におよぼす影響

—— 女子大学生の場合 ——

¹ 諸井 克英 ² 森 奈保子 ³ 板垣 美穂¹ 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・教授² 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2014年度卒業³ 同志社女子大学大学院・生活科学研究科・生活デザイン専攻・2012年度修了Effects of Abused Experiences on
Readiness-for-Parenthood in Female Undergraduates.¹Katsuhide Moroi ²Naoko Mori ³Miho Itagaki¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor²Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2014³Life Style Design Studies, Graduate School of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2012

Abstract

This study explores the relationships of experiences abused by respondents' own parents on the developmental stage and the readiness-for-parenthood cultivated by adolescence in female undergraduates. The Abused Experiences Scale developed by the authors and the Readiness-for-Parenthood Scale (Nishida & Moroi, 2010) were administered to female undergraduates ($N=469$). By the cluster analysis (Ward's method, squared Euclidean distance) for the Abused Experiences Scale, seven clusters appeared; Verbal aggression, indifference, reproof, neglect, violence, corporal punishment, and intimidation. The factor analysis of the Readiness-for-Parenthood Scale indicated four factors: concern for the child and baby, positive expectancy of a parental role, father as a role model, and anxiety about parenting in the future. According to the covariance structure analysis, as predicted, abused experiences negatively affected the readiness for parenthood. Verbal aggression by parents was the dominant negative factor. The significance of research is discussed from the point of view of motherhood.

Keywords: child abuse, Readiness-for-Parenthood, parenthood, adolescence.

I. 問題

先行研究（諸井・木村・長井・堺・西田，2013）でも指摘したように，児童虐待現象が顕在化しており，全国の相談所が扱う児童虐待

の件数（生後～高校生年齢段階まで）は増加の一途を辿っている（Appendix 1 参照）。とくに，ここ数年の間に著しい増加が見られるとともに，実母虐待の多さに加え実父虐待の漸増傾向も出現した。4ヵ月児検診を利用した横山・岡崎・

杉本・小田・塚本・水上・藺（2011）によれば、対象となった母親（第1子が12歳以下）の23.1%（1439名中333名）が子どもに対する虐待を認識していた。このような実母虐待は、古くから認められている（厚生省児童家庭局企画課調査<'73年4月～'74年3月、3歳未満：423件中実母虐待234件；実父虐待60件>；池田（1979）より）。

児童虐待に関するわが国の先駆的研究者である池田（1979）は、被虐待児童の特徴として次の8点を指摘した。①他人への基本的不信、②急性不安状態を伴う外傷反応、③衝動統制の障害、④知的および認知的欠陥、⑤自己概念の発達障害、⑥被虐待および自己破壊の行動、⑦親の像との分離困難、⑧学校での不適応や学業不振。実母虐待が子どもの心理的成長にもたらす否定的影響は、現在では一般的にはトラウマ（心的外傷）概念に包括される。トラウマとは、「精神が強烈な情緒的ないしは感覚的な刺激を受けることで、その機能が一時的に、ないしは不可逆的に失調をきたす事態」（岡野，2004）と一般的に定義される。「乳幼児が適度の情緒的ないしは身体的な刺激や養育を受けることができず育つ過程である」（岡野，2004）ネグレクトも含まれる。

このような被虐待経験の心理的影響については、臨床事例的研究だけでなく、計量的方法に

よっても実証されている。慢性反復性トラウマ反応による対人関係機能不全尺度を独自に作成した出野（2009）は、児童養護施設入所者（中学1～3年；男子38名、女子37名）と一般中学生（男子55名、女子55名）を対象として被虐待経験の効果を検討した。虐待体験者（身体的虐待、ネグレクト）は、虐待体験のない者に比べて、全般的に問題特徴をもつと施設職員によって判定された。坪井（2005）の研究でも、児童養護施設入所者（男子85名、女子57名；4～18歳）の行動や情緒の状態を施設職員に評定させたところ、被虐待体験者は、そのような体験がない者に比べて、種々の問題特徴があると見なされた。

ところで、大原・妹尾（2004）は、学童期の子どもをもつ母親を対象として虐待行動を示す母親が母性意識に欠けることを見いだした。しかし、虐待行動と母性意識との有意な関連を認めていない研究もある（中嶋，2004）。また、子ども時代の被虐待相当行為経験と自分の子どもに対する虐待相当行為との間に有意な関連が見いだされている（中嶋，2004；三上，2009）。これらは、母親が子どもに行使した虐待が子どもが親世代になりその子どもへの虐待と反復されるという、虐待の世代間伝達現象に関わる知見である（鵜飼，2000 参照）。

諸井ら（2013）は、女子大学生を対象として、

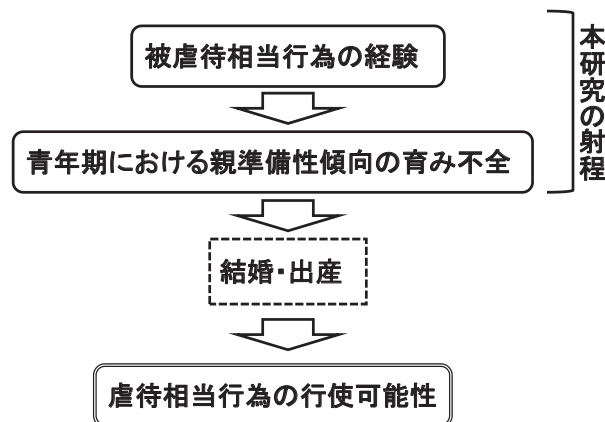


図1 虐待相当行為の再生産過程

小学5・6年の頃の親子間の接触経験に関する記憶が親になるための動機づけや心理的準備の育みすなわち親準備性傾向（西田・諸井，2010）にどのような影響をおよぼすかを検討した。共分散構造分析により親との否定的経験の記憶が親準備性傾向を損なうことが明確になった。そこで，本研究では，虐待相当行為の再生産過程を仮説化した（図1）。発達段階の初期に親による被虐待相当行為の経験が青年期になるまでに培われるはずの親準備性傾向を損ね，それが自分自身の子どもに対する虐待相当行為を誘発する虐待をする。

本研究では，親から受けた被虐待相当行為の経験時期を小学校に入学前の頃（幼稚園や保育園の頃）から小学校1～3年生までに設定し，青年期段階で醸成されている親準備性傾向に被虐待相当行為経験がどのように影響をおよぼすかを明らかにする。この目的のために女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。回答者を女性に限定した理由は前研究（諸井ら，2013）と同様で，実母による虐待の多さや（Appendix 1 参照），将来母親役割を担う可能性という点にある。

Ⅱ. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して，質問紙調査を実施した（2014年6月5日・9日，12月15日）。回答にあたっては匿名性を保証し，質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き，以下の尺度に完全回答した女子学生469名を分析対象とした（6月実施分：1回生117名，2回生80名，3回生31名，4回生6名；12月実施分：1回生200名，2回生15名，3回生16名，4回生4名）。回答者の平均年齢は18.99歳（ $SD=0.88$ ，18～23歳）であった。

質問紙の構成

質問紙は，回答者の基本的属性に加え，①被

虐待相当行為経験尺度，および②親準備性傾向尺度から構成されている。

1. 被虐待相当行為経験尺度

本研究では，回答者が親との間に生じた虐待に相当する行為を経験した頻度を測定した。被虐待相当行為の経験は，回答者が小学校に入学する前の頃（幼稚園や保育園の頃）や小学校1年から3年までの頃に限定した。被虐待相当行為は，虐待行動に焦点をあてた先行研究（鈴木・刀根・木村・及川，2002；中嶋，2004；大原・妹尾，2004）で用いられた尺度項目を整理して選択した。まず，3研究での項目を検討すると，次の4カテゴリーに分類された。①身体的虐待（物を使った加害行為，身体に対する直接加害行為，加害行為を伴わない間接的行為），②無視（言語的拒絶，放置），③性的虐待（直接的，間接的），④心理的虐待（言語，行動の強制，親による愛情の否定）。意味の重複や表現に留意しながら，最終的に55項目を作成した（Appendix 2 参照）。

回答者に小学校に入学する前の頃（幼稚園や保育園の頃）や小学校1年から3年までの頃を思い浮かべさせ，55個の被虐待相当行為をどのくらい経験したかを4点尺度で回答させた（「4. ひんぱんにあった」，「3. どちらかといえばあった」，「2. どちらかといえばなかった」，「1. まったくなかった」）。

2. 親準備性傾向尺度

個人的傾性としての親準備性を測定するために，西田・諸井（2010）による親準備性傾向尺度を利用した。後続研究でもこの尺度を使用した（諸井ら，2013），若干の因子構造の差異が認められた（ともに女子大学生対象；西田・諸井＜子どもに対する関心，将来の子育てに対する不安，モデルとしての父親，親役割に対する積極的期待，子どもに対する無条件の肯定，モデルとしての母親＞，諸井ら＜子どもへの関心，モデルとしての親，将来の子育て不安，親役割への積極的期待＞）。

原研究と同様に，6ヵ月間の回答者の生活を思い浮かべさせ，60項目（西田・諸井，2010

参照) それぞれがあてはまる程度を 4 点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお、以上の 2 尺度それぞれでの評定順の効果を相殺するために、尺度ごとに評定用紙を頁単位(被虐待相当行為経験尺度 6 頁; 親準備性傾向尺度 7 頁)で無作為に並び替えた。

Ⅲ. 結果

被虐待相当行為経験

1. 各項目に対する回答値の調整

被虐待相当行為経験 55 項目の平均値と標準偏差を検討した(Appendix 2 参照)。健常サンプルを対象としているので当然であるが、平均

値が 1.5 以上である項目は 5 項目のみであった(event_c_4, event_d_1, event_d_8, event_f_1, event_f_4)。次に、55 項目の回答分布を吟味したところ、回答カテゴリ分布に大きな偏りが認められた。そこで、この尺度はもともと間隔測度として考えていたが、2 値変量として扱うことにし、以下の手続きで分析対象項目を選択した。

まず、回答者の 90% 以上の者($N > 422$)が「1. まったくなかった」と回答した 15 項目を削除した(event_a_6, event_a_7, event_a_8, event_a_9, event_b_8, event_c_2, event_c_7, event_c_8, event_d_3, event_d_5, event_d_6, event_e_4, event_e_7, event_f_2, event_f_7)。

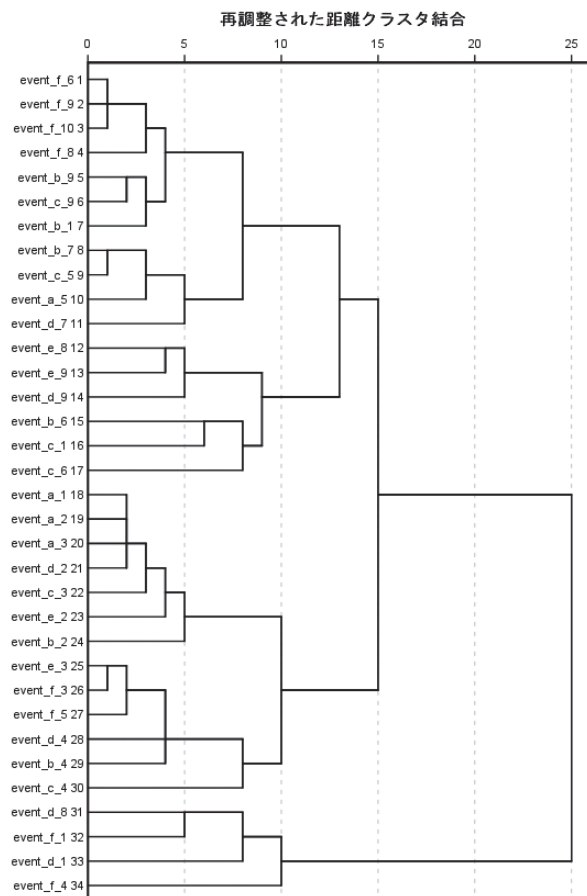


図 2 被虐待相当行為経験尺度に関するクラスター分析
(Ward 法, 平方ユークリッド距離) の結果 ($N=469$)

次に残りの 40 項目について、もとの 4 点尺度（「4. ひんぱんにあった」、「3. どちらかといえばあった」、「2. どちらかといえばなかった」、「1. まったくなかった」）を 2 点尺度（「1= 経験した」、「0= 経験しなかった」）へと変換した。2 点尺度化は、どちらかのカテゴリーが 10%（469 名中 47 名）以上となるように調整した（Appendix 2 参照）。つまり、4 点尺度の「4. ひんぱんにあった」を「1= 経験した」、「3. どちらかといえばあった」、「2. どちらかといえばなかった」、および「1. まったくなかった」を「0= 経験しなかった」と変換した。

2. クラスタ分析

上記のようにして 2 点尺度化した 40 項目を対象に、クラスタ分析を行った。Ward 法により、2 値データの平方ユークリッド距離に基づく測定変数の分類を試みた。9 つの小クラスターが検出されたが、クラスタ内の他項目と不整合な項目や構成クラスタ自体の意味が不

明確である項目を除き（6 項目）、34 項目で再度クラスタ分析を実施した。その結果、7 小クラスターが抽出され、各小クラスターの構成項目も一貫性が認められた。そこで、このクラスタ解を最終解とした（図 2）。

構成項目の意味を勘案して、各小クラスターを「言語攻撃」、「社会的放置」、「叱責」、「無視」、「暴力」、「体罰」、および「威嚇」とした。樹状図（図 2）を見ると、抽出された 7 つの小クラスターは、さらに大きな 2 つのクラスターから構成されていることが分かる。1 つめの大クラスター（「言語攻撃」、「社会的放置」、「叱責」、「無視」）は《間接的虐待》、2 つめの大クラスター（「暴力」、「体罰」、「威嚇」）は《直接的虐待》とそれぞれ解釈できる。

3. 下位尺度の構成

先のクラスタ分析で得られた 7 小クラスターの構成項目を下位尺度項目と見なし、以下の 2 通りの分析を行った。①当該項目得点と

表 1-a 被虐待相当行為経験における下位尺度の検討

	(a)		(a)
〔言語攻撃〕		〔暴力〕	
event_f_6 世話が面倒だと言われた。	.61	event_a_1 何か物を投げつけられた。	.73
event_f_9 痛い目に合わせると言われた。	.53	event_a_2 蹴られた。	.71
event_f_10 親が望んでいない子だと感じさせられた。	.63	event_a_3 髪の毛を引っ張られた。	.61
event_f_8 ところが傷つくことを繰り返し言われた。	.62	event_d_2 突き飛ばされた。	.64
event_b_9 かわいくない顔だと言われた。	.50	event_c_3 暴力をふるわれた。	.64
event_c_9 「お前はダメだ」と繰り返し言われた。	.63	event_e_2 殴られた。	.66
event_b_1 親に嫌われていると感じさせられた。	.57	event_b_2 何か物で叩かれた。	.63
	$\rho=.77$		$\rho=.86$
〔社会的放置〕		〔体罰〕	
event_b_7 幼稚園・保育園や小学校のことに関心を示してくれなかった。	.56	event_e_3 長時間にわたって立たされた。	.57
event_c_5 学校のことに関心をもちなかった。	.51	event_f_3 長時間にわたって正座させられた。	.40
event_a_5 いつも夕食を一人で食べていた。	.32	event_f_5 車の中に長時間にわたって残された。	.38
event_d_7 放っておかれていると感じた。	.43	event_d_4 家に入れてもらえなかった。	.59
	$\rho=.62$	event_b_4 押し入れや部屋などに閉じ込められた。	.45
〔叱責〕		event_c_4 家の外やベランダに閉め出された。	.50
event_e_8 ほんの些細なことで、ひどくしかられた。	.51		$\rho=.64$
event_e_9 長時間にわたって勉強を強制させられた。	.50	〔威嚇〕	
event_d_9 外出を過度に制限された。	.46	event_d_8 八つ当たりをされた。	.51
	$\rho=.65$	event_f_1 一方的に自分の意見に従うように強要された。	.57
〔無視〕		event_d_1 他のきょうだいの方を可愛がっていた。	.37
event_b_6 泣いても無視された。	.39	event_f_4 大声で怒鳴られた。	.43
event_a_1 大事にしていたおもちゃを勝手に捨てられた。	.37		$\rho=.71$
event_c_6 友だちが悪いことをしていても注意してくれなかった。	.32		
	$\rho=.50$		

N=469

(a): 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値 ($p<.001$)

ρ : Spearman-Brown の係数値

〈注〉項目に付した記号は、英文字が頁、数字がページ内の項目順を表している。以下の表でも同様である。

当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値の算出、② *Spearman-Brown* の ρ 係数値の算出。「無視」下位尺度では、①のピアソン相関値が有意ではあるが若干低く、②の ρ 値も .50 であったが、許容範囲と判断した。残りの 6 下位尺度は適切といえよう。

この分析を踏まえ、下位尺度項目の合計得点を項目数で割った値を下位尺度得点とした（表 1-c）。反復測定分散分析を用いて 7 得点の比較

を行うと、有意な主効果が認められ、「威嚇」が最も経験され、「社会的放置」、「体罰」や、「言語攻撃」があまり経験されない傾向があった。他の経験はこれらの中間に位置していた。

親準備性傾向

1. 項目水準の検討

60 項目について以下のように項目水準での検討を行った。項目平均値 ($1.5 < m < 3.5$) と標

表 1-b 親準備性傾向尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果—回転後の因子負荷量—

	I	II	III	IV
〔I. 子どもへの関心〕 $[r=.48 \sim .85, \alpha=.94]$				
read_a_4 私は、小さな子どもに関心がある。	.91	-.00	-.01	.09
read_a_3 私は、幼児の姿をついで追っていることがある。	.83	-.09	-.02	.18
read_b_5 私は、子どもをあまり好きではない。	* -.77	-.06	.05	.09
read_b_9 私は、小さい子どもの相手が苦手である。	* -.77	-.02	.03	.14
read_b_7 私は、幼い子どもの瞳にひきつけられる。	.75	.00	-.03	.07
read_a_6 私は、子どもが遊んでいるのを見るのは面白いと感じる。	.75	.03	.04	.05
read_f_3 私は、将来、子どもを扱う職業につきたいと思うことがある。	.72	-.05	.01	.03
read_b_3 私は、子どものこころの動きに興味がある。	.68	.02	.04	.11
read_g_5 私は、小さな子どもの世話をしたり、遊んだりするのは面倒である。	* -.68	-.08	.02	.19
read_c_9 私は、保育所や幼稚園の前を通りかかると、中をのぞきたくなる。	.66	.04	.00	.04
read_a_1 私は、幼い子どもが泣いていると、何とかしたいと思う。	.64	.01	.05	.02
read_b_4 私は、幼児の相手をうまくやれると思う。	.62	.15	-.04	-.12
read_c_6 私は、小学生の遊び相手になれそうである。	.62	.10	-.03	-.05
read_a_8 私は、テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る。	.61	.13	.05	.01
read_a_2 私は、遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる。	* -.55	.06	-.05	.15
read_d_6 私は、子どもとはおもしろい存在だと思う。	.51	.01	-.01	.06
read_c_5 私は、赤ん坊の泣き声を聞くといらいラすることがある。	* -.50	.05	-.01	.27
〔II. 親役割への積極的期待〕 $[r=.74 \sim .81, \alpha=.91]$				
read_d_9 私は、将来、親になった時のことを想像することがある。	.04	.85	-.01	.12
read_e_5 私は、将来、自分が親になることなんて考えたこともない。	* .09	-.83	.01	.05
read_e_3 私は、将来、自分が育児を楽しんでいる自分の姿を想像することがある。	.16	.74	-.01	-.08
read_g_6 私は親となって、子どもを育てたい。	.14	.72	.04	-.03
read_b_1 私は、将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想像する。	.22	.67	.03	.02
〔III. モデルとしての父親〕 $[r=.71 \sim .82, \alpha=.90]$				
read_f_7 私は、自分の父親のようになりたい。	-.01	-.02	.89	-.01
read_e_7 私は、父親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい。	-.01	.05	.88	.01
read_f_4 私は、父親について良い思い出がありません。	* .07	.02	-.81	.03
read_g_4 私は、父親が自分にしてくれたことをいろいろ思い出す。	.11	.01	.73	.05
〔IV. 将来の子育て不安〕 $[r=.33 \sim .70, \alpha=.80]$				
read_f_2 私は、将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する。	.01	.09	-.00	.77
read_d_1 私は、将来、泣く赤ちゃんを前にして、途方に暮れている自分を想像することがある。	-.07	.11	-.04	.73
read_b_6 私は、将来、子育てに疲れ果て、イライラしている自分を想像する。	-.09	-.03	-.03	.71
read_d_4 私は、将来、子どもをうまく育てられるかどうか不安である。	.12	-.13	.04	.68
read_f_1 私は、親になったら子どものために我慢ばかりすると思う。	.10	-.04	.04	.40
〔因子間相関〕				
	I	****	.60	.19
	II		****	.21
	III			****
				-.11

$N=469$

適合度: $\chi^2_{(347)}=1085.80, p=.001$

初期因子固有値 >1.86; 初期説明率 61.03%

*: 逆転項目

[] 内: 下位尺度の検討 j 結果

- [r 値: 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値 ($p=.001$)
- [α : *Cronbach* の α 係数

準偏差値 ($SD \geq .60$) のチェックをしたところ、12 項目が不適切であった ($m > 3.5$: read_d_8, read_e_9; $m \leq 3.5$: read_a_9, read_c_1, read_c_3, read_c_4, read_f_6, read_g_2; $m < 1.5$: read_c_2, read_e_8 / $SD < .60$: read_b_2, read_d_5; $SD < .60$ [平均値チェックと重複]: read_c_1, read_d_8, read_e_9, read_g_2)。

2. 因子分析

項目水準の検討で不適切であった 12 項目を除き、因子分析 (最尤法, プロマックス回転 $<k=3>$) を行った。まず、初期共通推定値を確認し、この値が低い項目 ($<.250$) を除去した (read_b_8, read_c_8, read_e_2, read_f_8, read_f_9)。残りの 43 項目を対象に、初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、①特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値 $\geq .40$)、②他因子への負荷が小さい (絶対値 $<.40$) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ絶対値 .40 以上の負荷量を示すように、項目を削除しながら、①と②の基準を充たすまで分析を反復した。算出可能であった 2~8 因子解を検討したが、4 因子解が最も適切であった (表 1-b)。先行研究 (西田・諸井, 2010; 諸井ら, 2013) を参考に各因子を以下のように命名した。「I.

子どもへの関心」, 「II. 親役割への積極的期待」, 「III. モデルとしての父親」, 「IV. 将来の子育て不安」。

3. 下位尺度の構成

各因子への負荷量の絶対値が .400 を上回る項目を選抜し (表 1-b)、下位尺度を構成した。4 つの下位尺度それぞれで検討を行った。あらかじめ逆転項目の調整を行い、以下の 2 通りの分析を試みた。①当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値の算出、② Cronbach の α 係数値の算出。4 下位尺度すべてで①と②で適切な結果が得られた。そこで、下位尺度項目の合計得点を項目数で割った値を下位尺度得点とした (表 1-c)。

反復測定分散分析によって 4 得点の平均値比較を行ったところ、有意な効果を検出された。下位比較によると、「II. 親役割への積極的期待 $>$ I. モデルとしての父親 \leq III. モデルとしての父親 $>$ IV. 将来の子育て不安」の有意な傾向が得られた。得点分布を吟味すると、いずれも正規性分布からの有意な逸脱が認められた。将来の子育て不安得点では低得点方向への偏り、他の 3 得点では高得点方向への偏りがあった。

表 1-c 各尺度における下位尺度得点の検討

	平均値	標準偏差	分布の正規性検定
〔被虐待相当行為経験〕			
言語攻撃	0.16 d**	0.26	0.31, $p=.001$
社会的放置	0.16 d	0.26	0.36, $p=.001$
叱責	0.28 bc	0.35	0.32, $p=.001$
無視	0.31 b	0.34	0.27, $p=.001$
暴力	0.24 c	0.32	0.27, $p=.001$
体罰	0.18 d	0.25	0.29, $p=.001$
威嚇	0.47 a	0.35	0.17, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕 $F_{(5.39/2522.23)}=113.47^*, p=.001$			
〔親準備性傾向〕			
I. 子どもへの関心	2.95 b**	0.66	0.07, $p=.001$
II. 親役割への積極的期待	3.12 a	0.79	0.15, $p=.001$
III. モデルとしての父親	2.95 b	0.85	0.16, $p=.001$
IV. 将来の子育て不安	2.51 c	0.61	0.09, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕 $F_{(2.48/1161.84)}=63.63^*, p=.001$			

N=469

*Greenhouse-Geisser の検定

**異なる英文字は有意に異なることを表す ($p<.05$, Bonferroni の方法)

分布の正規性検定: Kolmogorov-Smirnov の検定に対する Lilliefors の修正値

被虐待相当行為経験と親準備性傾向との関連

以上の分析で得られた得点相互の関連を検討するために、ピアソン相関分析、重回帰分析、および共分散構造分析を行った。

1. ピアソン相関分析

被虐待相当行為経験 7 得点と親準備性傾向 4 得点の間のピアソン相関値を求めた (Appendix 3)。すべての組み合わせで有意な値が得られたが、顕著に高い相関傾向は見られなかった ($-.30 < r < +.25$)。小学 3 年くらいまでに親から被った不適切な行動経験と青年期になってからの親準備性傾向との間には一般的関係があるといえよう。

2. 重回帰分析

「被虐待相当行為経験⇒親準備性傾向」という影響経路を仮定し、次の一連の重回帰分析 (ステップワイズ法; 投入基準 $p < .05$, 除去基準 $p > .10$) を行った。被虐待相当行為経験 7 得点を説明変数とし、親準備性傾向 4 得点それぞれを従属変数とした (表 2)。

まず、《間接的虐待》クラスターと分類される側面の結果を見る。「言語攻撃」経験は、親準備性傾向 4 側面いずれも損ねた。他の経験は、親準備性傾向 4 側面に弁別的に影響した。「無視」経験は、「親役割への積極的期待」を低下させ、「将来の子育て不安」を高めた。次に、《直接的虐待》クラスターに該当する側面を見ると、「威嚇」経験は、「子どもへの関心」を損ね、「将

来の子育て不安」も上昇させた。また、《間接的虐待》クラスターに属する「社会的放置」と《直接的虐待》クラスターの「暴力」は「モデルとしての父親」の醸成を抑制した。なお、「叱責」と「体罰」は有意な規定因ではなかった。

3. 共分散構造分析

Amos22.0.0 を利用して因果分析を行った。先の重回帰分析で得られた関係に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式 (最尤推定法; 豊田, 1998) の分析を試みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終的に最終モデルを得た (図 3)。なお、重回帰分析では有意であった「威嚇→子どもへの関心」と「威嚇→将来の子育て不安」の影響経路を設定しても適合度改善につながらなかった。他の有意な影響経路は重回帰分析の結果と同じであった。

IV. 考察

本研究の目的は、発達初期段階で経験した被虐待相当行為が青年段階で醸成されている親準備性傾向におよぼす影響の実証的解明であった。

小学校に入学前の頃 (幼稚園や保育園の頃) から小学校 1~3 年までの頃に限定して被虐待相当経験を想起させた。クラスター分析によると、7 つの小クラスターを認めることができ、さらに《間接的虐待》(「言語攻撃」, 「社会的放置」, 「叱責」, 「無視」) と《直接的虐待》(「暴力」,

表 2 被虐待相当行為経験が親準備性傾向におよぼす影響—重回帰 (ステップワイズ法) の結果—

[被虐待相当行為経験]	[親準備性傾向]			
	I. 子どもへの関心	II. 親役割への積極的期待	III. モデルとしての父親	IV. 将来の子育て不安
言語攻撃	-.11c	-.21a	-.16b	.13c
社会的放置			-.13c	
叱責				
無視		-.13b		.12c
暴力			-.11c	
体罰				
威嚇	-.12c			.12c
	$R^2=.04a$	$R^2=.09a$	$R^2=.11a$	$R^2=.09a$

N=469

ステップワイズ法: 投入基準 ($p < .05$); 除去基準 ($p > .10$)

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

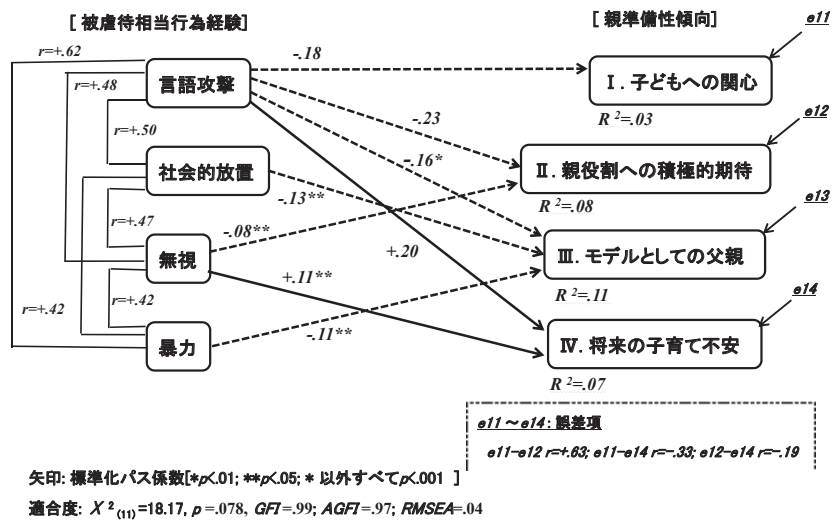


図3 被虐待相当経験が親準備性傾向におよぼす影響—共分散構造分析 (Amos22.0, 最尤推定法) による因果分析 ($N=469$)—

「体罰」, 「威嚇」) という2つの大クラスターから構成されていた。下位尺度得点の平均値比較の結果を見ると, 「威嚇」が最も経験され, 「社会的放置」, 「体罰」や, 「言語攻撃」があまり経験されておらず, 他の経験はこれらの中間に位置していた。本研究では健常サンプルを対象としていることから《直接的虐待》をあまり経験していないと推測されるが, 「威嚇」の傾向は説明が必要であろう。10年以上前の被虐待相当行為経験の想起は歪みを伴うとも推測される。たとえば, 「威嚇」的行為は他の行為よりも恐怖をもつので心理的インパクトをもつために, 実際の生起頻度よりも過大に記憶されるのかもしれない。しかし, この解釈は, この「威嚇」経験が親準備性傾向に決定的な影響をもたないことを説明できない。

本研究の主目的は, 被虐待相当行為経験が親準備性傾向におよぼす影響の解明であるが, 被虐待相当行為経験7得点と親準備性傾向4得点との間の単純相関分析では (Appendix 3), 顕著に高い相関値ではないがすべての組み合わせで有意な相関値が現れた。したがって, 小学3年くらいまでに親から不適切な行動経験と青年期になってからの親準備性傾向との間には予

測通りの一般的関係があるといえる。影響関係を明確にするために, 重回帰分析や共分散構造分析を実施した。重回帰分析では有意な規定因であった「威嚇」は, 共分散構造分析においては親準備性傾向への影響経路を設定する必要がなかった。

《間接的虐待》3側面 (「言語攻撃」, 「社会的放置」, 「無視」) が親準備性傾向に否定的影響をもたらしていたが, とりわけ「言語攻撃」が親準備性傾向4側面すべてに有意な影響を見せた。また, 《直接的虐待》では, 「暴力」経験が「モデルとしての父親」の側面に影響を与えたのみであった。したがって, 本研究では, 子どもに直接的恐怖を喚起する被虐待相当行為よりも, むしろ認知的に高次な処理を必要とする言語的行為が子どもにとってトラウマとなり得るのであり, 「社会的放置」や「無視」も親によるそのような行為の意味や解釈を子どもに喚起するという点で同様に深い傷を残すと推測される。このように考えれば, 心理的衝撃度が高いはずの「威嚇」はその時点での恐怖が高い分だけ当該行為の意味や解釈を必要とせず深い認知的処理を生起しないのかもしれない。

「暴力→モデルとしての父親」の有意な影響

経路は、「暴力」虐待の担い手が父親であることを示唆している。西田・諸井（2010）で抽出された「モデルとしての父親」と「モデルとしての母親」の両側面が今回の研究でも得られていれば明確にできたが、虐待の担い手について回答者に問うていなかったことも本研究の問題点といえよう（回答コストを縮減するためにそのようにした）。

ところで、松田・林（2005）は、小学3・4年生を対象に、次の2パターンを用いた親の叱り方に関する心理的効果を検討した。①理由明示的な叱りことば<なぜその行為がいけないのかを伝える>、②感情的叱りことば<理由をまったく説明せず感情的に叱る>。叱られていることに対する受諾度については差はなかったが、理由明示的な叱りことばよりも感情的叱りことばのほうで反発度が高かった。「威嚇」が親準備性傾向に対する効果のなさや「言語攻撃」が示す一般的効果は、松田・林の知見を踏まえると、親の行為に対する原因の所在認知が媒介している可能性も考えられる。人気作家である湊の『母性』（2012）では、母-娘間に生じる様々な出来事に関する母と娘による解釈と受容の乖離が巧みに描かれている。つまり、親子間の相互作用に関するこのような乖離可能性の観点では虐待の心理的効果を扱う場合にも重要であろう。

最後に本研究のいくつかの問題点と今後の課題を述べよう。虐待を受けた子どもに対する表現療法と認知行動療法の統合的アプローチを唱導しているGil（2006）によれば、虐待がもたらすトラウマには次のような要因が関わっている。①トラウマ関連要因（トラウマ・タイプ、体験期間、体験曝露の様態、二次的災害やストレス体験の回数・強さ）、②養育者関連要因（養育者の精神障害歴、過去のトラウマ体験）、③親子関係要因（関係の質、子どもに対する親の理解）、④状況関連要因（社会経済的地位、現在の生活ストレス、家族支援）。しかしながら、本研究では被虐待相当行為経験の有無を測定しただけであり、Gilが挙げたような要因を

尋ねていない。今後、虐待の関連要因も含めた測定を行うべきであろう。

さらに、親準備性傾向に関する不全傾向が回答者が母親になる過程でどのように否定的機能を見せるのかという、今後の研究課題もある。たとえば、Stern, Bruschweiler-Stern, & Freeland（1998）によれば、母親になる段階は、次の3段階から構成される。①妊娠期間（母親となるために適切な心理的状態の編成）、②出産後の数ヶ月の期間（赤ちゃんとの親密な関係の形成）、および③自分の母親と自分との関係と赤ちゃん自分との関係の比較対照期間。Sternらは、本研究の前提と異なり、①～③の段階で発現する母性を問題としている。また、そもそも家族内の虐待は、①児童虐待（親から未成年の子どもに対する暴力）、②配偶者虐待（配偶者に対する暴力）、および③高齢者虐待（子どもから親への暴力）に分類される（棚瀬，2004）。被虐待相当行為経験は、本研究で対象としたような①だけでなく、②や③にも影響をもつ可能性があるだろう。

庄司（1992）によれば、児童虐待に関するモデルとして、次の3モデルが提起されている。①精神医学的モデル<加害者個人の要因>、②社会的ストレスモデル<家庭に対するストレスが家庭内暴力の発生原因として捉える立場>、③子どもの養育者におよぼす影響モデル<親から子どもへの一方向的な原因だけでなく、子どもも親に影響をおよぼすという相互作用的観点>。これらのモデルを踏まえ、庄司は虐待発生に関する包括的モデルを提起した。先述したように、本研究の主目的である被虐待相当行為経験の親準備性傾向への影響は実証されたといえるが、重回帰分析や共分散構造分析における最終目的変数の説明率（ R^2 値）は有意であるがかなり低かった。これは、本研究の回答者が健常サンプルであるとともに、庄司が指摘するように虐待発生原因が多重であることも関わっているであろう。

以上に論じたように、本研究の目的（図1での「射程部分」）はおおむね達成できたが、今

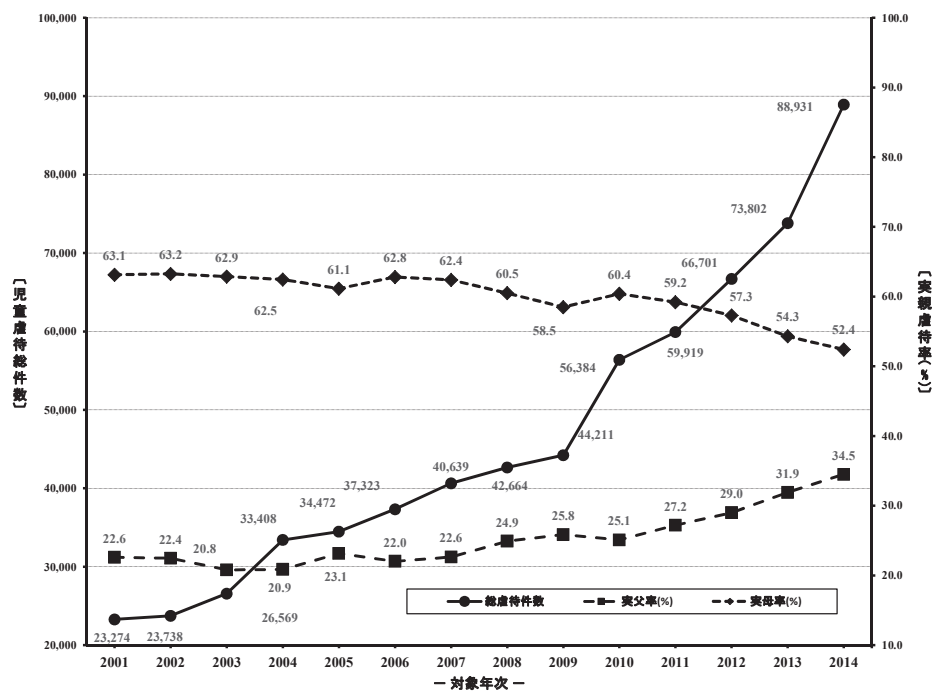
後も引き続き取り組むべき問題点も浮き彫りになった。また、福田・石村(2011)は、男女大学生を対象として、親になったときの子どもの叱り方と現在の親準備性傾向との関連を検討し、男女差を見いだした。福田・石村の試みは図1の下段部分に関連する。本研究では女子大学生に限定したが、このような男女差を導入しながら、研究の構図(図1)を修正・拡大していくべきであろう。

〈付記〉

- (1) 本報告は、森奈保子が第1著者の下で卒業研究のために立案・実施した研究に基づいている。板垣美穂が収集・整理した追加データと併せてデータ分析を行った。
- (2) 本研究でのデータの整理・分析に際して、本学の教育・研究推進センターの2015年度研究助成金(「家族トラウマの世代間伝達に関する実証的研究－幼少期における被虐待経験と親準備性傾向－」)を利用した。記して感謝する。
- (3) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 22.00 for Windows と Amos 22.00 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- 出野美那子 2009 青年期前期における慢性反復性トラウマによる対人関係機能不全尺度改訂版の妥当性の検討 *トラウマティック・ストレス*, **7(2)**, 157-165.
- 福田貴広・石村郁夫 2011 青年期における親準備性や父性度が叱り方に及ぼす影響 *東京成徳大学臨床心理学研究*, **11**, 24-36.
- Gil E. 2006 *Helping abused and traumatized children: Integrating directive and nondirective approaches*. Guilford Press. 小川裕美子・湯野貴子訳『虐待とトラウマを受けた子どもへの援助－統合的アプローチの実践－』2013 創元社
- 池田由子 1979 『児童虐待の病理と臨床』創元社
- 三上真千恵 2009 幼児に対する虐待相当行為についての研究－世代間伝達現象と夫婦関係の視点から－*心理相談センター年報*(比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター), **5**, 31-37.
- 松田君彦・林紋子 2005 親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究(Ⅱ)－原因の所在に関する認知が受容過程に及ぼす影響を中心に－*鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要*, **15**, 149-156.
- 湊かなえ 2012 『母性』新潮社
- 諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美 2013 親との接触経験が親準備性傾向の形成におよぼす影響 *学術研究年報*(同志社女子大学), **64**, 71-81.
- 中嶋みどり 2004 非臨床群の母親における児童虐待相当行為に関連する心理学的要因の検討 *広島大学大学院教育学研究科紀要第三部*, **53**, 249-257.
- 西田郁美・諸井克英 2010 親準備性傾向尺度の作成 *生活科学*(同志社女子大学), **44**, 39-44.
- 岡野憲一郎 2004 *トラウマ* 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕(編)『心理臨床大辞典 [改訂版]』培風館 708-712 頁
- 大原美知子・妹尾栄一 2004 学童期の子をもつ母親の虐待行動とその要因 *社会福祉学*, **45(1)**, 46-56.
- Stern D. N. Bruschweiler-Stern N. & Freeland A. 1998 *The birth of a mother: How the motherhood experience changes you forever*. Basic Books. 北村婦美(訳)『母親になるということ－新しい「私」の誕生－』2012 創元社
- 鈴木祐子・刀根洋子・木村恭子・及川裕子 2002 男女別による子ども虐待の認識と世代間伝達に関連－ビネット調査とPBI測定から－*日本赤十字武蔵野短大大学紀要*, **15**, 25-30.
- 庄司順一 1992 小児虐待 小児保健研究, **51(3)**, 341-350.
- 棚瀬一代 2004 虐待 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編『心理臨床大辞典 [改訂版]』培風館 821-824 頁
- 豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編]－構造方程式モデリング－』朝倉書店
- 坪井裕子 2005 Child Behavior Checklist/4-18 CBCLによる被虐待児の行動と情緒の特徴－児童養護施設における調査の検討－*教育心理学研究*, **53**, 110-121.
- 鶴飼奈津子 2000 児童虐待の世代間伝達に関する一考察－過去の研究と今後の研究－*心理臨床学研究*, **18(4)**, 402-411.
- 横山美江・岡崎綾乃・杉本昌子・小田照美・塚本聡子・水上健治・蘭潤 2011 乳児から小学生の子どもをもつ母親の虐待認識についての検討 *日本公衆衛生雑誌*, **58(1)**, 30-39.



Appendix 1 全国児童相談所に対応した児童虐待件数の推移と実父・母率
(厚生労働省・福祉行政報告例に基づき作成)

Appendix 2 被虐待相当経験に関する回答分布

	—回答カテゴリー—				平均値	標準偏差
	1	2	3	4		
event_a_1 何か物を投げつけられた。	364	59	38	8	1.34	0.70
event_a_2 蹴られた。	364	57	41	7	1.34	0.70
event_a_3 髪の毛を引っ張られた。	375	56	31	7	1.30	0.66
event_a_4 長時間にわたって無視された。	373	64	27	5	1.28	0.62
event_a_5 いつも夕食を一人で食べていた。	417	43	7	2	1.13	0.42
event_a_6 病気になっても医者になかなか連れていってもらえなかった。	443	24	2		1.06	0.26
event_a_7 体の露出度の高い服を着せられた。	465	4			1.01	0.09
event_a_8 「あんたなんか生まれてこなければ良かった」と言われた。	439	23	5	2	1.08	0.35
event_a_9 年齢不相応な早期教育を強要された。	443	18	8		1.07	0.32
event_b_1 親に嫌われていると感じさせられた。	363	71	27	8	1.32	0.66
event_b_2 何か物で叩かれた。	320	75	64	10	1.50	0.81
event_b_3 怪我をさせられた。	407	40	21	1	1.18	0.50
event_b_4 押し入れや部屋などに閉じ込められた。	385	47	32	5	1.27	0.63
event_b_5 長時間にわたって言葉をかけられなかった。	369	66	29	5	1.30	0.63
event_b_6 泣いても無視された。	305	115	37	12	1.48	0.75
event_b_7 幼稚園・保育園や小学校のことに関心を示してくれなかった。	407	50	11	1	1.16	0.44
event_b_8 セックスの話を聞かされた。	461	5	3		1.02	0.19
event_b_9 かわいくない顔だと言われた。	391	47	26	5	1.24	0.60
event_c_1 大事にしていたおもちゃを勝手に捨てられた。	349	78	36	6	1.36	0.68
event_c_2 火を近づけて脅かされた。	463	5	1		1.01	0.14
event_c_3 暴力をふるわれた。	372	55	30	12	1.32	0.71
event_c_4 家の外やベランダに閉め出された。	310	70	76	13	1.56	0.86
event_c_5 学校のことに関心をもたなかった。	385	61	23		1.23	0.52
event_c_6 友だちが悪いことをしていても注意してくれなかった。	311	129	27	2	1.40	0.62

Appendix 2 のつづき

	一回回答カテゴリー				平均値	標準偏差
	1	2	3	4		
event_c_7 大怪我をしても医者のところに来ていってもらえないことがあった。	453	14	2		1.04	0.21
event_c_8 ボルノを見せられた。	464	5			1.01	0.10
event_c_9 「お前はダメだ」と繰り返し言われた。	392	52	20	5	1.23	0.57
event_d_1 他のきょうだいの方を可愛がっていた。	280	124	49	16	1.58	0.81
event_d_2 突き飛ばされた。	381	54	32	2	1.26	0.60
event_d_3 食事を与えられなかった。	449	18	2		1.05	0.23
event_d_4 家に入れてもらえなかった。	370	59	36	4	1.30	0.65
event_d_5 黙ってどこかに用を足しに行った。	423	34	9	3	1.13	0.44
event_d_6 友だちが刃物で遊んでいるのに止めなかった。	459	8	2		1.03	0.18
event_d_7 放っておかれていたと感じた。	359	74	30	6	1.32	0.65
event_d_8 八つ当たりをされた。	279	106	65	19	1.62	0.87
event_d_9 外出を過度に制限された。	320	96	42	11	1.45	0.75
event_e_1 恥をかかされた。	356	87	25	1	1.30	0.57
event_e_2 殴られた。	333	77	45	14	1.45	0.79
event_e_3 長時間にわたって立たされた。	409	42	13	5	1.18	0.52
event_e_4 裸同然の薄着で外に出された。	455	12	2		1.03	0.20
event_e_5 着替えを手伝ってくれなかった。	364	78	24	3	1.29	0.59
event_e_6 体の調子が悪くても幼稚園・保育園に行かされた。	359	83	23	4	1.30	0.60
event_e_7 衣服の洗濯をしてもらえなかった。	460	7	1	1	1.03	0.21
event_e_8 ほんの些細なことで、ひどくしかられた。	324	99	38	8	1.42	0.71
event_e_9 長時間にわたって勉強を強制させられた。	371	64	26	8	1.30	0.65
event_f_1 一方的に自分の意見に従うように強要された。	275	128	52	14	1.58	0.80
event_f_2 首を絞めるふりをされた。	439	18	12		1.09	0.37
event_f_3 長時間にわたって正座させられた。	416	27	22	4	1.18	0.54
event_f_4 大声で怒鳴られた。	169	138	121	41	2.07	0.98
event_f_5 車の中に長時間にわたって残された。	415	47	6	1	1.13	0.39
event_f_6 世話が面倒だと言われた。	419	35	11	4	1.15	0.47
event_f_7 体に異常に関心をもたれた。	449	16	4		1.05	0.26
event_f_8 こころが傷つくことを繰り返し言われた。	368	67	27	7	1.30	0.65
event_f_9 痛い目に合わせると言われた。	406	34	22	7	1.21	0.59
event_f_10 親が望んでいない子だと感じさせられた。	408	40	16	5	1.19	0.53

N=469

1. まったくなかった, 2. どちらかといえばなかった, 3. どちらかといえばあった, 4. ひんぱんにあった
 回答者総数の 10%: N=47

Appendix 3 下位尺度得点間相互の関係ーピアソン相関値ー

	x-1	x-2	x-3	x-4	x-5	x-6	x-7	y-1	y-2	y-3	y-4	
〔被虐待相当行為経験〕												
言語攻撃	x-1	***	.50a	.55a	.48a	.62a	.46a	.57a	-.18a	-.27a	-.30a	.25a
社会的放置	x-2		***	.40a	.47a	.42a	.36a	.43a	-.15a	-.19a	-.26a	.21a
叱責	x-3			***	.45a	.53a	.44a	.59a	-.15b	-.20a	-.22a	.16a
無視	x-4				***	.42a	.44a	.45a	-.16a	-.23a	-.22a	.23a
暴力	x-5					***	.63a	.54a	-.12b	-.18a	-.27a	.20a
体罰	x-6						***	.47a	-.10c	-.15b	-.20a	.15b
威嚇	x-7							***	-.18a	-.24a	-.26a	.25a
〔親準備性傾向〕												
I. 子どもへの関心	y-1								***	.65a	.19a	-.36a
II. 親役割への積極的期待	y-2									***	.22a	-.26a
III. モデルとしての父親	y-3										***	-.10c
IV. 将来の子育て不安	y-4											***

N=469

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$